

駐日エチオピア大使 アブドゥルラシッド閣下への インタビュー

聞き手：児玉由佳

2008年8月11日、駐日エチオピア大使館を訪問し、大使であるアブドゥルラシッド閣下へのインタビューを行いました。大使は、2006年3月に日本に赴任され、2008年は、TICAD IVやG8サミットなどの準備でひじょうに多忙な1年を過ごされました[†]。

—本日はよろしくお願ひいたします。

今回このような機会を与えていただき、ありがとうございます。

まず、先日亡くなられた福井勝義先生のご家族に心からお悔やみ申しあげます。

福井先生は、エチオピアにおいて、長い間文化人類学の調査に従事されてきました。彼の支援によって、多くのエチオピア人が文化人類学を学び、調査を行うことができました。また、日本ナイル・エチオピア学会、京都大学、日本エチオピア協会の活動にも多大なる貢献をしてくださいました。エチオピアは、真の友を一人失うことになってしまいました。本当に悲しいことです。

—まず、大使のパーソナル・ヒストリーを伺いたいと思うのですが…

私は、1961年、エチオピア・ソマリ州のワルデルで生まれました。父は、ハイレ・セラシエ皇帝

の時代に東部のケブリダハル州の州知事を務めていました。しかし、皇帝との意見の相違によって、エチオピア北部のゴジャム州にあるデブレ・マルコスへ国内追放の処分を受けることになってしまいました。私はその間、デブレ・マルコスのNegus Teklehaimanot小学校に通いました。1974年に軍事独裁政権が帝政を転覆させたときに、父がアディス・アベバへと連れて行かれたため、私はアディス・アベバで、中学はAfrica School、高校はTegbare Id(Technical)Schoolに通いました。そして1976年、軍事独裁に耐えられず、私たち家族はソマリアへ逃れ、難民となったのです。

難民ではあったものの、その間に、Jawhar高校を卒業し、ソマリア国立大学で1983年に化学の学士号を取得しました。その後、1984年にUSAIDの支援により奨学金を受け取って、アメリカのアリゾナ大学で土壌・水学を学び、1986年に修士号を得ました。1987年にはエチオピアはまだ軍事独裁政権下でしたので、ソマリアの家族の元へ戻りました。1991年に軍事独裁政権が崩壊したのち、1993年に母国エチオピアへと戻ったのです。

—日本に来られる以前は、水資源省の副大臣を務められていらっしゃいましたが、エチオピアに戻られてからどのような経歴を歩まれたのでしょうか。

1994年から95年には、エチオピア南東部において、南東部放牧地プロジェクト(SERP)という放牧地統合開発プロジェクトのマネージャーをしていました。24万5000平方キロメートルを管轄し、300万人以上の人々に、獣医サービスや土地利用

† なお、インタビュー後、世界経済の大きな変化によってエチオピアも影響を受け、また、日・エ間でもさまざまな出来事がありました。そのため、本インタビューに加えて2009年1月に再度電話によるインタビューを行い、それに基づいて一部加筆修正を行っています。

管理、水の供給などを提供しました。その後、1995年後半から2000年と2003年から2005年には、水資源省の技術部門担当の副大臣を務めました。また、エチオピアのソマリ州知事も務めました。

—ソマリ州の知事になられたんですね。

5年間連邦政府レベルの水資源省の副大臣を務めたあと、2000年の第二回民主選挙で、私は、所属する党(ソマリ人民民主党: Somali People's Democratic Party)のワルデル選挙区の州議会議員の候補となり、圧倒的多数の支持で当選しました。そして、ソマリ州政府の知事として3年間(2000~2003年)働きました。ソマリ州は、ソマリアと国境を接しており、かなりの開発が必要とされる地域であるとともに面積的にも最大の州の一つでもあるため、知事としての仕事はとてもチャレンジングでした。

その後2003年中頃にソマリ州を離れ、再び水資源省に復帰して副大臣となりました。そして、2005年の第三回民主選挙で連邦議会の議員としてワルデル選挙区から選出され、2006年に駐日大使に任命されたのです。

—日本の印象はいかがですか？

日本人々は、とても親切で、お互いが良く知りあえば社交的な人々であることがわかってきました。エチオピア人と似ているところもたくさんあります。挨拶のときにお辞儀をするところとか、日本の茶道とエチオピアのコーヒーセレモニーとか、植民地化されたことがなく誇り高いところ、そして歌も「エンカ」がエチオピアの歌と似ているといったところでしょうか。

日本のよいところは、人々がとてもハードワーカーであることです。政府機関や会社でも、人々が夜遅く、場合によっては夜10時ぐらいまで働いているのをよく見かけます。これこそが、短期間で日本が成長した秘訣ではないかと思っています。

もうひとつ、日本の良いところは、文化や伝統を大事にしているところですね。お祭りもあるし、お盆などで人々が自分の出身地にもどって、祖先を祭るといった習慣があります。このような親睦の集まりは、素晴らしい文化であり伝統だと思います。若者も着物を着ることがありますし、人々は日本の文化を尊重しているという印象を受けまし

た。寺や神社のような宗教的な場所もよく保存されています。何百年も前に建築された民家もきちんと維持されていますし、伝統が尊重され大事に守られていると思います。

また、茶道は、ひじょうにすばらしい文化ですし、この文化を維持するために、子供や若者たちも茶道を学ぶべきではないでしょうか。

—エチオピアの経済成長は近年順調だと聞きました。

1990年代半ばから、エチオピアの経済は成長し続けています。特に最近の5年間は、常に10%以上の成長を維持しています。非産油国の中では高成長を遂げた国の一つになります。現在世界が直面している経済・金融危機の影響からエチオピアも免れてはいませんが、2009年には11.2%の成長を見込んでいますし、2008年12月18日付けの『エコノミスト』では、エチオピアは2009年に4番目に高いGDP成長率(7%)を達成する国になるであろうと予測されています。エチオピアの急成長は、1990年代半ばからの農業開発主導工業化(ADDI)の堅実な政策の成果だといえます。

—日本とエチオピアとの関係はどのようなもののでしょうか？

エチオピアと日本は、1920年代にまでさかのぼれる歴史的な関係を築いてきました。公式な国交は1955年に樹立されています。われわれの関係は、さまざまな面にわたっています。まず、経済協力において、日本は主要な開発パートナーの一つであることが挙げられます。日本は、エチオピアに対する海外開発援助として、無償資金援助や技術支援を提供しています。特に重点が置かれているのは、農業、教育、保健、インフラ、水関連です。これらの支援は、エチオピア政府の貧困撲滅のための努力にひじょうに貢献してくれています。2008年9月のナイル川にかかるヒダセ(ルネッサンスの意)橋の開通式で、メレス・ゼナウイ首相閣下が、この橋を日本とエチオピアの間の素晴らしい関係を表す「生ける記念碑」(living monument)と呼んだのがその一例です。

二国間の貿易関係も向上しつつあります。エチオピアは日本にコーヒーや花、特にバラですが、そして皮、蜜蝋などを輸出しています。そして日

本はエチオピア・コーヒーの第2位の輸入国です。一方、日本は、機械、自動車、化学製品、IT機器などをエチオピアに輸出しています。2008年9月には、大規模な貿易・投資促進合同ミッションが我が国を訪問しましたし、今後二国間の貿易や投資協力が増大していくことが期待されています。TICADを通して、二国間の協力がさらに促進されることでしょう。エチオピアは、クール・アース・パートナーシップにも署名しましたし、「新生JICA」による円借款スキームも、我が国にも得るものがあると期待しています。アジアの経験にもとづいて、特に工業生産性の向上についてですが、日本が民間セクターを援助することができるでしょう。

外交的には、相互利益をもたらせるよう、国際的なフォーラムで緊密に協力しあっています。そして文化的関係も強化しつつあります。エチオピアのミレニアムの年にエチオピアでは日本文化関連のイベントがありましたし、2008年に日本でも同様にエチオピア文化関連のイベントが開催されました。それぞれの国の人々が互いの文化を認識し、理解を深めることができたことは間違いありません。このように、日本とエチオピアの二国間には、深く根づいた関係があり、その関係は強固な基盤の上に築かれているのです。今後も、われわれ姉妹国間の関係がさらに強化されていくことで、輝かしい未来が待っていると期待しています。

—最後に日本ナイル・エチオピア学会会員へメッセージをお願いします。

日本ナイル・エチオピア学会は、エチオピアの

文化人類学やその他の分野の前進に大きな貢献をもたらしてくれている、ひじょうにすばらしい組織です。また、エチオピア研究に携わる日本人のみならずそれ以外の人々が、さらに理解を深めることにも貢献してくれています。エチオピアの学生や、エチオピア研究に興味がある人々に対するナイル・エチオピア学会による支援は測り知れないほどです。

すばらしい研究者であった福井教授や、学会のほかの優れた先生方や研究者たちが、日本とエチオピアとのこのようなすばらしい関係をさらに強固にしてくれています。福井教授が亡くなられたことは本当に残念なことですが、ナイル・エチオピア学会が、エチオピアに関する研究活動への取り組みを倍加させ、活動範囲ももっともっと拡大されていくことを期待しています。私の任期中は、姉妹国である日本とエチオピアのすばらしい関係をさらに強化し、ナイル・エチオピア学会を支援していきたいと思います。故福井教授や、同じくこの堅固な関係の促進に日夜尽力されている研究者の方々の希望がかなえられるよう、私もできる限り協力いたします。

このような機会を与えていただきありがとうございます。ありがとうございました。

—ありがとうございました。

(こだま・ゆかノアジア経済研究所)